

短編小説・奈津子

小倉 一純

その日、奈津子は、会社の指定する定宿のホテルで、出勤前の身支度をしていた。

白の長袖ブラウスに紺のスカートをはいて、ウエストには細身の赤いベルトを回しつける。首には、会社のロゴの入ったネッカチーフを結んだ。そこへ、スカートと同じ色のジャケットをきっちり着こなす。

最後に、イヴサンローランをつけた右の人差し指で、耳の後ろをそっと触れる。香水は、商社に勤める大介からのプレゼントだ。

部屋を出る直前に彼女は、ピンクのダウンジャケットを肩から羽織った。

ホテルのエントランスに、頼んでおいたタクシーが来ていた。空港までは十数分の距離だ。間もなく二月である。奈津子を乗せたタクシーは、後ろのスパイクタイヤを空転させながら発進した。彼女はいつも通り、職場へ向かった。千歳空港には全日空五十七便（ボーイング727）が、定刻より四十五分おくれ

て到着していた。

給油、荷物の積み込み、機内清掃などを済ませて、冬特有の天候がこれ以上崩れなければ、折り返し五十八便となる。

機長ら三名はそのまま搭乗を続け、客室乗務員には新しく、二十代の女性四名が乗り込んで来た。その中に奈津子がいた。

宮澤奈津子は、今年で二十四歳になる。父親は、札幌の生まれだ。地元の国立を卒業して銀行に就職し、いまは大通公園の本店に勤務している。母親は元小学校教諭だ。それと札幌市内の教育大に通う妹がいた。

結局五十八便は、定刻からおよそ四十五分おくれて、午後一時三十三分に空港を離陸した。函館、そして岩手県上空を経由して羽田へ向かう。

シートベルトのサインが消えて、彼女たち客室乗務員は、乗客に飲み物のサービスを始めていた。

一方、航空自衛隊の練習機（F-86F）二機が、五十八便とほぼ同時刻に、宮城県の松島基地を飛び立っていた。

猛訓練を終えて息つく暇もない一月三十日の夜、林田の隊に航空機衝突事故の一報が入った。

全日空五十八便と、松島を飛び立った航空自衛隊の練習機のうちの一機が、岩手県の雫石町の上空で空中衝突事故を起こしたのだ。その日の午後二時過ぎのことであった。現場の空は雲ひとつない、天気のよい寒い日だった。

林田は百三十名の部下を率いる中隊長である。階級は一尉だ。宮城県の陸上自衛隊・多賀城駐屯地の所属である。彼らはこの一週間、雫石からもそう遠くない岩手山麓の演習場で、雪に足を取られながらも、猛訓練に明け暮れていた。

中隊は再び、豪雪の雫石町へ向かった。到

着したのは翌日未明である。町へ入ったところで血なまぐさい匂いがしていた。衝突後、双方とも操縦不能に陥り、墜落したのだった。警察、消防、地元町役場から大勢の人が出て、雪の中、すでに懸命の搜索が始まっていた。

F-86Fの訓練生は、墜落する直前に、風防ガラスのはずれたところから、パラシュートで脱出して無事だった。だが五十八便は絶望的な状況であった。

夜が明けてみると、木という木に、雪と氷にまみれた、おびただしい数のストッキングや下着、衣類、着物の帯が引っかかっていた。まるで七夕まつりの短冊たんざくのようだった。

そんな中、五十八便の操縦士ら三名は、雪の山肌に激突して大破した、機首の中で発見された。

日は昇ったが、気温は零度にも達していない。人間としての態を保っていない遺体が多い。

かった。先頭に立って急峻な雪の斜面に分け入っていた林田が、ひとかたまりの残がいを見つけた。着雪はあるものの全日空の文字が見える。五十八便の胴体の一部であつた。

その脇へたどり着き反対側へ回ってみると、それは大きく開口していた。内部はかろうじて原形をとどめている。薄暗い、座席の傍らに、そこへ寄りかかるようにして立つ人影があつた。生存者なのか！

よく見ると、美しい顔立ちの女性である。落下速度の影響なのか、衣服のほとんどは剥ぎ取られていた。林田は、一瞬、男性の本能をたぎらせたが、すぐに己を恥じた。

近づく、女性の首には深いしわが一周している。彼女の首から上は、一回転していたのである。

サツと血の気が引き、ギョツとして、声も出せなかった。彼は、ふるえる手で無線機をつかみ、応援を呼んだ。

おやっ、ボールのような小さな雪の塊が、

斜面を転げ落ちて行くぞ。次の瞬間、地響きとともに、局所の表層雪崩が始まった。林田も全日空機の残がいも、すべてが雪に埋もれてしまった。

圧力に押しつぶされそうになりながらも、真っ暗な雪の中で彼は、残った空気を必死に吸いながら、生き延びようとしていた。だが、寒さで体力は次第に奪われていく。酸素も薄くなり、彼はとうとうと、眠りに落ちていった。

林田信之は都立高校を卒業して国立の理系に進んだ。勉強一本の高校時代を過ごし、志望の大学に入ったのだ。だがなぜか、彼の心にはポツカリと穴が空いていた。大学の同級生たちは、誰も彼もがまるで面白味のない勉強の虫に思えた。彼は親にも内緒で、二年になった時に大学を辞めた。原点に立ち返って、自分をもう一度見つめ直したいと思ったのである。

翌年、彼は防衛大学校へ入学した。高校に入るまではボーイスカウトや登山など、彼はアウトドアを愛する子供だったのだ。卒業後は陸上自衛隊の幹部候補生となり、それから七年が過ぎていた。

どれぐらい経ったのだろうか。彼は、次第に覚醒するのを感じていた。

「大丈夫ですか？ 寒くないですか？」

女性の呼びかける声が聞こえている。目をこらすと、全日空機の残がいの中に立っていた、あの女性である。心配そうな顔でこちらをのぞき込んでいる。

「お陰様で、なんとか大丈夫ですが……、少々寒いです」

林田が答えた。

「このブランケットを使ってください」

そういつて彼女は、全日空のマークの入ったブランケット二枚を、座席の林田にかけた。

「ありがとう」

林田は彼女の顔を下から見上げた。

「私、宮澤、宮澤奈津子といいます。この飛行機の客室乗務員です。あなたは？」

「僕は林田信之。陸上自衛隊の中隊長です。あなた方を助けに来たのですが……」

「ありがとうございます」

「あっ、いえ」

「でももう、私は、あなた方とは帰れないんですよね。私もう、死んでいるんですよ……」

林田はどう返事をしたらよいか分からなかった。

「お願いします、林田さん。私、手紙を書くので、それを富士大介という人に届けてくださいませんか。東京にいる私の恋人なんです」

奈津子は、大介と同じ札幌の高校を卒業して、東京の学習院女子短大へ進んだ。彼は一浪して早稲田の門をくぐった。

二人は大学のサークル活動で偶然に顔を合わせた。高校の頃からなんとなく意識し合っていた二人が恋人同士になるのに時間はかか

らなかった。

彼は世界を相手に働きたいといい、丸の内の総合商社に入った。彼女も、世界を飛び回る仕事したいと若い女性らしい希望を抱き、国際線のある日本航空を目ざした。だが最終面接でダメになり、全日空に就職を決めた。

後悔はしていない。もともと人と接することの好きな奈津子は、現在の職場に十分な遣り甲斐を感じるようになっていた。そんな矢先の事故であった。

彼女は立ったまま、機内に備えつけのメモ用紙に、短い文章を書いて渡した。それを林田は、防寒ジャケットの左の内ポケットへしまった。

座席に眠る林田を、若い隊員たちが取り囲み、口々に叫んでいる。

「中隊長！」

「中隊長！」

気がついた彼は次第に状況を理解した。雪

崩と、全日空のロゴの入ったブランケット。そして左の内ポケットを探ってみる。やはりあった。

取り出した二つ折りのメモ用紙を開くと、それは間違いなく、彼女の書いた手紙である。

「大介さん 楽しかった もう一度だけ会いたかった ありがとう 奈津子」

彼女は、雪崩で入り込んだ雪に押し倒され、機体の床に横たわっている。首から下は雪に包まれ、その美しい顔だけが、林田の視界に入っていた。

隊員たちは、雪を冠った木立を切って、応急の担架をこしらえた。そこへ彼女を寝かせ、持参した毛布をそっとかけてやった。

指には、流行色のマニキュアをしていた。

彼女はまだ二十四歳の客室乗務員である。

事故は百六十二名の尊い命を奪った。その中のひとりが、宮澤奈津子だった。

鉛色の空からはいつしか粉雪が舞っていた。